平成28年6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市で見られるようになったニホンカモシカ

最近、市内の多摩川北側の丘陵部やその周辺で、ニホンカモシカが目撃例が増えています。こんなに標高が低い場所でニホンカモシカが目撃されるのは、かつてないことです。ニホンカモシカは、シカという名前が付いていますが、シカ科ではなくウシ科カモシカ属の哺乳類です。カモシカ属はアジアだけに分布し3種に分けられています。日本に分布するのはニホンカモシカで、日本固有種です。本州・四国・九州の山地に生息しています。ひと昔前までは高山の岩場で見られるイメージでしたが、むしろ、亜高山帯以下のブナやミズナラを中心とした冷温帯落葉広葉樹林が主たる生息場所です。昭和9年（1934）に国の天然記念物に指定され、昭和30年（1955）には国の特別天然記念物に格上げされて保護されています。

以前から奥多摩山地に生息していましたが、見る機会はほとんどありませんでした。青梅市で見ることができるなど考えもしませんでした。青梅市でニホンカモシカが目撃例が出始めたのは1990年代に入ってからと思われれます。奥多摩町でニホンジカが増えて、植林した苗木が齧られる林業被害が出たり、シカ食害により裸地化した山腹の土砂崩壊が問題になった時期です。増えたニホンジカは分布を拡大し、雲取山から長沢背稜、川乗山を経て高水三山周辺まで東進してきました。成木地区や沢井地区でシカ食害被害が出始めた時期です。

ニホンジカは集団生活をします。ニホンジカが増えると生息地の若葉などを食べ尽し、ニホンカモシカは餌の確保にも困ってきます。ニホンジカとの競合を避け、ニホンジカ分布圏の外側への移動が始まります。こうして、まだニホンジカの生息密度が薄い低標高の丘陵地まで、ニホンカモシカの分布が広がってきました。平成6年（1994）時点では高水三山周辺の成木地区や沢井地区での目撃例が多く、成木川流域では成木三丁目の二本竹川流域まで目撃例が出ました。

1990年代前半に、奥多摩山地のニホンカモシカにパラポックスウイルス感染症が発生しました。これに感染すると、唇や口内、目や蹄（ひづめ）の間の粘膜質の部分がただれて、採食困難となり衰弱するとともに、蹄の間が発症すると歩行困難になります。高水山麓の林道で衰弱して行き倒れたニホンカモシカの死体は何回となく発見され、市役所に通報がありました。ニホンカモシカは国の特別天然記念物なので、死亡個体が発見された時は、自治体の教育委員会を通じて、文化庁に「滅

失届」の提出が義務づけられています。青梅市教育委員会の文化財担当は郷土博物館なので、ニホンカモシカ死体発見の通報があると、郷土博物館の職員が現地に赴き、確認して文化庁に報告します。文化財担当には、こんな仕事もあるんですね。死体の処理も基本的に市役所が行います。因みに、平成6年度（1994）から平成27年度（2015）の間に、市がニホンカモシカの死体を確認・処理して文化庁に報告したのは56件です。死亡原因はさまざまですが、平成14年度（2002）まではパラポックスウイルス感染症による死亡個体が確認されていますが、その後は、電車や車に撥ねられた事故死がほとんどです。パラポックスウイルス感染症がまだ残っているのか気になります。

奥多摩のニホンカモシカにパラポックスウイルス感染症が広がったのは、ニホンカモシカの習性に原因があります。ニホンジカが集団生活をしているのと異なり、ニホンカモシカは秋の交尾期と母親がその年に生まれた子と一緒にいる以外は単独で縄張り（テリトリー）をつくって生活しています。1頭当たりの縄張りは直径500m～1kmとされています。同性間では行動圏が隣接しあい、ほとんど重複しません。縄張りに侵入者があれば同性の場合は追い出します。このため、自らの縄張りを誇示するために、縄張り内のあちこちに発達した眼下腺から分泌する粘液（目ヤニ）をこすりつけます。ところが、隣の縄張りの個体が境界に来ると、既にこすりつけられている目ヤニの上に自分の目ヤニをこすりつけ、ここは俺の縄張りだと誇示します。この結果、目ヤニ感染によりパラポックスウイルス感染症は地域個体群に広がっていきます。一時は、奥多摩山地からニホンカモシカは絶滅するのではとまで危惧されました。

2000年代後半になると、ニホンジカの分布拡大に伴い、その外縁部でニホンカモシカも分布を広げました。これまで見られなかった青梅丘陵の周辺や勝沼・根ヶ布地区、黒沢・小曾木・富岡地区の丘陵部でも目撃例が増えています。奥多摩山地のニホンカモシカが増えたというよりは、ニホンジカ勢力圏からニホンカモシカが弾き出されて低標高地まで進出してきたと推定されます。黒沢二丁目の都道を歩く姿や、富岡の飯能市との境で目撃されている事例もあります。

青梅市でニホンカモシカが頻繁に見られるようなことは、30年前なら予想もできなかった事態です。背の低い樹木の若葉や草本類が食べられますが、集団生活をするニホンジカほどの食害は起きていないと思われます。但し、人工林率が高い地域では、ヒノキ植林地などが集中的な被害に遭うこともあります。犯人がニホンジカかニホンカモシカかの判別は難しいですが。

なお、ニホンカモシカの角は生え変わることはないので、樹木の年輪と同じように角に角輪が刻まれます。角輪の数により年齢が分かります。また、その年の成長の程度により角輪の幅が違ってきます。メスの場合だと出産の年には角輪の幅が狭くなるので、角輪の幅によりいつ出産したかも分かります。

（文責 久保田繁男）